

## 続 野殿・童仙房地域における

### 協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク

#### A Sequel to a Fieldwork for the Collaborative

#### “Learning Space” in Nodono-Dosenbo Area

研究代表者 児玉 華奈 (D2)

教員 前平 泰志

研究分担者 岡田 薪子 (M2) 生駒 佳也 (M2)

#### 〔研究目的〕

野殿・童仙房地域は、京都府最南端の南山城村にある 125 戸（2009 年 1 月時点）からなる標高約 500m の高原の農村である。奈良県、三重県、滋賀県に隣接しており、最寄りの関西本線大河原駅から急勾配の坂を車で 15 分ほど上った高原地帯に集落を形成している。野殿は、近世以前から続く古い歴史をもつ村落であり、一方、童仙房は明治に入って開拓政策によって作られた近代村である。背景の異なる二つの区は、それぞれ独自の共同体を形成しているが、小学校を共有することで結びついてきた。両区の境に設置された野殿童仙房小学校は 2006 年 3 月をもって閉校したが、同年 6 月、両区の住民と京都大学大学院教育学研究科によって「野殿童仙房生涯学習推進委員会」が設けられ、「新しい生涯学習空間づくり」を目指すことになった。

このため、京都大学と地元との交流や共同の研究会は 3 年間継続されてきた。生涯学習推進委員会の運営を中心に相互理解を進めてきたが、昨年度からは研究開発コロキウムを通じて大学院生が、両区に関する歴史や風習、現在の住人の意識分析を含めた研究を行った。本研究はこの成果の上に立つものである。地域との協働をめざすためには両区の歴史や産業、また文化などをより詳しく調べ、社会関係を理解し、生涯学習空間づくりの基礎的な知識として蓄積することが必要であると考えられる。

本研究では、童仙房における独自の葬送儀礼とその変化、また、両区の中心的な生業である茶業の過程と生産者の意識、さらには、入植と開拓に関わる歴史とその位置づけに焦点をあて考察を試みる。これらの研究成果を共有することは「学びの空間」づくりの基礎となるが、地域と研究過程を共にすること自体に大きな意味が含まれていると考える。

### 〔研究経過〕

研究代表者及び研究分担者は、野殿童仙房生涯学習推進委員会が主催する「風と雲の広場」や農業体験だけでなく、野殿の大祭や童仙房の秋祭り、さらには消防団などの地元組織の集会にも参加し、地域社会を把握する機会を数多く設けた。この上でそれぞれの研究課題にもとづく資料調査や聞き取りを進めていった。

聞き取りは、年齢や地域差にも注意をはらい、のべ23回行ったが、内3回は共同で行った。研究分担者のうち岡田は教育社会学講座に所属するが、より広い研究関心から参加している。また、コロキウムを支える研究会においては、登録者以外にも幅広い研究分野からの参集がみられ、それぞれの専門分野から多角的な提言を得ることができた。これらの参加者は教育学研究科にとどまらず、他学研究科や他学部の院生・学部生も含まれていた。また、研究過程を地元と共有するために、それぞれの課題を説明する機会を設けた。このことはさらに広い意見や証言を得ることにつながり、研究を継続する基盤ともなっている。

### 〔研究成果〕

児玉は、変化しつつある葬送儀礼を精査するだけでなく、過去の形態をできるだけ採録しようと努めた。開拓村である童仙房では、各地から集まった異なる習俗をもった者が共同体を形成することになったが、寺社が最初に作られていることから、その共同性には宗教意識や死生観が深く関わっていたことが伺える。児玉は、その中でも葬儀に着目し、「組」と呼ばれる独自の地域組織において担われる儀礼を、異なる4組11名に及ぶ聞き取りをもとに採録した。人々の親疎の尺度として用いられる「地縁」「血縁」関係を振り出しから形成してきたこの地域では、葬儀は重要な意味をもってきたが、児玉はこれを土地を媒体とする関係性の中に位置づけようとした。

岡田は、両区の生活を支えるお茶に注目し、中でも製茶の過程にかかわる住民のこだわりから生活世界について言及した。生業は生計を支えるだけでなく、その生活の中心として広く人々の意識を規定している。また、地域の多くが茶畑と水田からなる両区において、空間と時間はお茶と米によって形成されているともいえる。特に童仙房においては、お茶は村の成立過程とも大きく関わってきた。生涯学習空間をとらえるにあたり、地元の人々が、どのような空間と時間を持ち、それが異なる大学との間で、どのような関係性を持ちうるのかを考えるための基礎的な考察となっている。

生駒は、開拓政策によって形成された童仙房が、戦後においても入植の対象地として選ばれ続けた意味を考察した。開拓は単に「未開地」における食料増産をめざすものとしてだけではなく、「移民」として社会的な意味をもった政治的再配置に連なっている。

「第二次」入植によって定着した2戸が、満州と北海道から再び「移民」として入植してきた過程から、近現代の「日本」という枠組み自体を問おうとした。

(文責：生駒 佳也)